



江戸川区立葛西第二中学校 学校だより

芙蓉

令和6年11月11日発行  
第20号「チャレドリ・弁論大会号」  
発行人 校長 植木 清

教育目標

- ・自ら進んで学ぶ生徒になろう
- ・健康でたくましい生徒になろう
- ・あたたかい豊かな心の生徒になろう

## 第2学年職場体験 社会と直接触れあった3日間



10月23日（水）～25日（金）の3日間、第2学年の職場体験が行われました。この職場体験は、文部科学省の方針で全国の中学生が行うことになっています。江戸川区では、職場体験を「チャレンジ・ザ・ドリーム（チャレドリ）」と名付け、全中学校の2年生が実習を行っています。昨年度までは5日間の実施でしたが、今年度から3日間以上と区の方針が変更になりました。5日間の受け入れが可能な事業所が少ないことが理由の1つです。江戸川区のチャレドリには、3つのねらいがあります。



- (1) 職場体験を通して、多くの方々と触れ合い、コミュニケーション能力や社会性及び思いやりの心等の道徳性を身に付ける。
- (2) 様々な生き方に触れることにより、自分の将来を考える機会とする。
- (3) 発達段階に応じて、望ましい勤労観・職業観をもち、自らが進路を選択・決定していくことに必要な能力・態度を身に付ける。



昨年度も同じことを書きました。職場体験は、実際に体を動かし、頭を使い、その職業に携（たずさ）わる方との交流や仕事に触れることを通して、学校の中だけでは学ぶことができないことを体験する貴重な機会となっています。見学だけというお客様扱いでなく、安全に配慮しつつも、職員の方と同じような仕事や作業を体験させていただけるようお願いしています。ほんの入り口の部分でしたが、社会の厳しさを含め、「やりがい」をもって働くということが感じ取れたのではないのでしょうか。人材不足が深刻な問題になっています



ますが、単に労働者が欲しいのではなく、意欲に満ちた労働者を社会は求めているのだと思います。現実、電車の定期券発行、スーパーのレジなどロボットやAIに取って代わられている仕事もあります。いずれにしても、仕事、生活の全てにおいて「やりがい」や「生きがい」、「社会貢献」といったことを常に念頭に置き、自分は何を成すべきかを考え実践していくことが大切なのではないでしょうか。



## 江戸川区立中学校弁論大会

1月2日（土）に江戸川区立中学校弁論大会が総合文化センターで開催されました。葛西第二中学校からは学校代表として、2年4組 目黒 明日香さんが参加しま

した。堂々と発表し、立派に重責を果たしました。ここに、弁論を紹介します。



### 『私の思う当たり前』

2年4組 目黒 明日香

昔から、男女で役割分担をしてきた日本人にとって性別への固定観念は強く、時には男女差別になることもあります。例えば「男子はズボン、女子はスカート」などの考えは制服にも取り入れられているため、多くの人が当たり前のように感じているのではないのでしょうか。私も幼稚園の頃から今まで、特に違和感をもたず、この性別で区別する考え方を普通のことだと思っていました。

その当たり前が変わったのは「ジェンダーレス制服が公立学校の約三割で導入された」という記事を読んだからです。まず、ジェンダーレス制服というものが、性別に関係なく自由に選べるものだと知り、驚きました。気になって調べてみると、男女で違う制服を着ることによって「男子だから、女子だからと言われているようだ」と違和感をもったことから不登校になってしまった生徒やトランスジェンダーなどの社会問題に配慮した制度でした。私の住む江戸川区の中学校では三分の一も制服選択制を導入していることがわかりました。私の学校でも導入されることを思い出し、この制度をより身近に感じました。

これらのことから私は、固定概念に強く影響されている男女別制服を見直し、生徒が自由に制服を選べるジェンダーレス制服を普及させるべきだと思います。そう考える理由は二つあります。一つ目は制服が作られた目的です。本来の制服は貧富や身分の差に関係なく、学べることを象徴する制服であり、決して男女の区分けを明確にするためのものではありません。ジェンダーレス制服には、自由に選べるアイテム数が多く、男女でも違いが生じにくいデザインという特徴があります。

二つ目は、機能面です。動きやすさや防犯対策のためにスカートよりズボンのほうが良いと考える人も多いことです。私自身も、休日の部活動の時は制服ではなく、動きやすい体育着を選ぶことが多いです。また、ジェンダーレス制服について、全国の小中学生に行ったアンケート結果では、八割が賛成と回答しており、生徒たちに好評です。トランスジェンダーの人以外にも先ほどあげたようなメリットがあるのだと考えられます。

しかし、制服は学校の伝統や顔であり、進路選びにも影響するため、すぐに変えることが難しいのも現状です。変えたとしても、今の着用率は一割ほどにとどまっています。その理由として、世間からの視線が気になるという点があげられます。着用することにより、自分の意に反してカミングアウトしてしまう可能性があるからです。思いがけず、トランスジェンダーというレッテルをはられてしまうことから、着用率があがらないのだと考えます。実際、ジェンダーレス化は企業でも進んでいて、表記の改善などにも取り組んでいるそうです。

今後、ジェンダーレス制服が特別なものという認識ではなく、「誰でも着用できる身近なもの」だということをもっと多くの人に知ってもらえたらいいと思います。

この話題から改めて日常を思い出してみると、「男子だから重いものを持って」や「女子なのに虫が好きなの？」などの無意識に放つ一言が偏見に繋がってしまうのだと気付きました。学校生活でも整列が男女別であったり、委員会の選出が男女一名ずつであったり、男女で区分けされているところを目にすることがあります。学校でこのような区分けが行われることにより、生徒に偏った認識が根づいていく危険性があるのではないかと考えました。学校は多数ではなく、全ての人の意見に耳をかたむけられるような場であってほしいです。

今の私にできることは、相手を思いやったり、言動に気をつけたりすることです。そして、私の思う当たり前でその人を決めつけないで理解できる人になりたいです。学校や自分の認識にとらわれず、思いやりをもって接することができる人が増えていくことを願っています。